書　評

森本武利 編著，酒井謙一 訳
『京都療病院お雇い医師ショイベ――滞日書簡から――』

明治初期，京都における医学の近代化の第一歩は，1872（明治5）年に開設された京都療病院から始まる．お雇い外国人としてヨンケルついでマンスフェルトが活躍し基礎作りをした．

ハインリッヒ・ボート・ショイベはその後任としてドイツから招聘され1877（明治10）年に着任した．ライプチッヒ大学出身でブンダーリッヒ門下．当時東京医学校（東京大学医学部の前身）で活躍していたエルウィン・フォン・ベルツの4年後輩に当たる．ショイベの謹勉で真面目な診療態度や業績に関し数多くの書物が発刊されているが，在日中の生活の状況について不明な部分が多かった．

著者は，現京都府立医科大学の前身である京都療病院に貢献したショイベの活躍について新しい資料の収集を心がけていた．そのたゆまぬ探索努力が実ってこの度ショイベの孫からショイベが母親にあてた書簡のコピーを入手できた．滞日中を中心に月二回程度の頻度で母親に送り続けた書簡がそれで，これらの手紙の内容を色々な角度から分析し検討を加えて公開したのが本書である．計111通（一部欠落あり）の手紙が収録されており，ショイベの滞日時の活躍状況が鮮明に伝わってくる．母親からの返書は残念ながらまだ見つかっていない．135年も前の私信がこのような形で保存されているのは幸運なことである．日独交流150周年の記念すべき今年（2011年）絶好のタイミングで本書は発刊された．

本書は2部構成で，第Ⅰ部のショイベの母親への書簡が中心の書籍であるが，第Ⅱ部 の「京都療病院とお雇い医師」だけでも小冊子となる位よくまとまっていて参考となる．

書簡の内容は多岐に渡るため通常どこに何が書いているか分りにくいものだが本書では目次が工夫されていて年代順に書簡ごとに親切な要旨が掲載されているので参照しやすく便利である．

滞日約4年，日々の思いを綴り母親に送っている．病院での日常の仕事内容や自宅でのできごとをことこまかに述べ，それらを通じて日本人，日本の社会を観察した結果，それに関する考えを論じた．当時の京都の様子や日本人の姿が描出されていて注目に値する．

「私は絶えずあなたのことを考えておりました」「一言申し上げたいのですが，よい入れ歯を入れるのを忘れないようにして下さい．健康のためにそれは大切なことです」．24歳の若さで祖国から遠く離れた京都に赴任してきて母親の健康を気遣うこのような文面は，随所に見出される．ショイベの一語一句が母親の心の支えになっていたに違いない．

ショイベ自身のことは，「今はほとんど1日中病院で過ごしています」，「めったに真夜中前には休みません」と健在ぶりと勤勉ぶりを報告している．しかし「船が着いても待っていた手紙を積んでいないときは不機嫌になりました」，「子供じみて思えるかも知れません．しかし遠い海外に滞在した者だけがこの病的な状態を知っていて……」と，ホームシックに悩まされていたことを来日半年後に告白した．手紙にはやはり人間性が出る．勤勉な医師で几帳面な研究者の一面だけでなく弱い人間の一面が現れていて興味深い．史実ではショイベは谷赫と結婚した後離婚しているがその間の経緯を伝えた書簡はない．母親への配慮のためだろうと推察する．

書簡は母親や自分の消息を伝えているだけのものではなく，様々の人との交流の状況や日本各地を訪問した時の様子を綴る．中でもベルツとの交流は特別なものであるように私には思える．日本到着時，「以前，ライプツイヒでは，私たちは遠い存在でしたが－彼は，年齢でも学業でも私の何

年か上です」と述べ，後に1880年東京を訪問した時に「東京のドイツ人社会はかなり大きいです．ベルツはドイツ人社会で抜きんでた地位を占めています」，と評価した．本書では「ベルツの出迎え」，「ベルツ京都訪問」など8通以上の書簡にベルツの名が上っている．1879年11月17日の手紙にベルツが上洛時，二人は出会い何日間を共に過ごした，という記載を見た時は心が躍った．ベルツ側の資料では一切記載されていない新事実である．

脚気研究と寄生虫研究はショイベの業績の代表的なものである．手紙では脚気研究に言及する部分は多い．1878年2月17日の書簡で，「日本人自身が自分たち自身の事情に決定的に通じていないのです」と述べ，日本人論を展開している．脚気の場合も同様，と述べ，日本人にしか見られない脚気について日本人は詳しくない，と記す．さらに母親の質問に答える形で，脚気は日本の大都会の若い人たちを冒す病気として説明している．その後帰独途中1882年バタヴィアに寄港，脚気の症例に接し精力的に研究を続けた様子を伝えた．

本書は，ショイベの得難い第一級の新史料である．今後ショイベ宛ての母親からの返書が発掘されれば公開を期待したい．

（山上　勝久）

［思文閣出版，〒605-0089 京都市東山区元町355，TEL. 075（751）1781，2011年6月，A5判，346頁，7,000円＋税］

青柳精一 著
『近代医療のあけぼの――幕末・明治の医事制度――』

わが国の医学の歴史の中でも，幕末から明治にかけては，ひときわ興味深い時代である．19世紀に入って，それまでの漢方を中心とした医学に少しずつ蘭学が浸透していた．そこに幕末の動乱が加わり，西洋医学の導入が一気に加速される．幕末には長崎でポンペによる医学伝習が行われ，明治になると大学東校（現在の東京大学医学部）にドイツ人教師が雇い入れられ，ドイツ医学が本格的に導入され，卒業生たちによって全国に広まっていく．医制によって医師の資格制度が定められ，医術開業試験が開始され，続いて医学校の整備が進められていく．明治末には，帝国聯合医会と明治医会が長年にわたり対立続けた末にようやく医師法が成立し，医術開業試験が廃止されることになる．

本書『近代医療のあけぼの』は，ひときわ光彩を放つこの時期の医学の歴史を飾るさまざまなエピソードを一つ一つ取り上げ，豊富な資料に基づいて紹介したものである．どのようなエピソードが取り上げられているかは，目次をみると分かりやすい．

第一章　序論
第1節　幕末期の蘭医学の交流と高階安芸守の建白
第2節　ペリーの来航と堀田正睦の開国論
第3節　各国との修好通商条約の締結と遣米・欧使節団
第4節　松木弘安，福沢諭吉らの「夷情探索」――医療施設について
第5節　幕末海外に渡航した医師たち
第6節　蘭語に代わる英仏露語の台頭と各種辞典の出版
第二章　明治新政府の発足とその医事政策
第1節　あたらしい政治体制の確立
第2節　明治初期の医界の動きと二つの医学校
第3節　ドイツ医学の導入
第4節　お雇い外国人医師の来日
第5節　海外留学生制度で渡航した留学生
第6節　「医制」の制定と長与専斎
第7節　明治初期の開業医師と医学校（塾）
第8節　各種医師団体（結社）の誕生あいつぐ
第9節　医術開業試験と漢洋医学闘争